



愛知淑徳大学

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES

Newsletter

第31号

URL=<http://www2.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>

発行年月日：2011年3月20日
〒480-1197 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9
Phone 0561-62-4111 EX 2498
FAX 0561-63-9308
E-mail : igws@asu.aasa.ac.jp

IGWS 第31号ニュースレターの目次

○第23回定例セミナー報告	1・2
○学生感想文	3
○男性的職業のもとでの思い	4
○「かわいい」を上代にさかのぼる	5
○第4回「ジェンダー視点の卒業論文」報告会	6
○女子学生のための護身術 / 第24回定例セミナーのお知らせ	7
○2011年度ジェンダー関連授業紹介	8

長久手キャンパスにて、第23回定例セミナー「家事・育児はほんとに楽しいか」（2010年10月11日）を開催致しました。以下はその概要です。

第23回
定例
セミナー

講師 岡崎 勝さん
(名古屋市立桃山小学校教員)



家事・育児はほんとに楽しいか？

—男が試されるとき、女が試されるとき—

勤労者世帯の過半数が共働きとなっている現在、父親も子育てができる働き方の実現が求められている。しかも夫の家事・育児時間が長いほど第2子以降の出生の割合が高いことから、少子化対策としても、父親の長時間労働の是正や育児休業の取得促進の見直し求められている。しかし女性の育児休業取得率は約90%にまで上昇したものの、男性の場合は1.56%と低いのが現状である（平成20年度）。厚生労働省も育児を積極的にする男子＝「イクメン」を増大させるため、平成22年6月17日に「イクメンプロジェクト」を開始した。

今回、講師の岡崎勝先生は、男性に対する育児休業がまだ法的に認められていなかった時代に「育児」を実践された経験と、小学校教員という立場で体験された或いはされている「女の子」・「男の子」の問題、そして最後に男性と女性の生きづらさについて語られた。

共働き家庭における1男1女の父親としての岡崎先

生の「育児」体験は、保育所探しから始まったという。午前8時前には勤務校に出勤するために、7時半からの保育所の保育時間では間に合わず、当時女性には認められていた2時間の育児時間を、男性にも適用できるかどうか教育委員会に問い合わせたが、それは適用できないとのことであった。そこで東京都の町田市では、条例で男性の育児休暇が認められていたので、法律に則ってそれを申請した。しかしながらその願いが却下されたので、今度は教育委員会に勤務条件変更願いを提出されたとのことであった。

それに対して、学校には抗議の電話と手紙が殺到し、翌朝のラジオにおける女性アナウンサーのコメントは「ひどいですね」、「こんな先生に自分の子を見て欲しくない」というものであったという。職場の反応は、男性教員には呆れられ、女性教員には「腹立たしい」と言われ、正しいことではあるが実際支持してくれる人は少なかったと、当時のことを語られた。

岡崎先生は「育児や家事は好き嫌い」で行うもので

はないとお考えである。家事育児は楽しいことばかりではない。特に育児の場合には、夜も寝ることができない疲れから追い詰められることもあり、児童虐待の事件の中には追い詰められた親の姿が見られる。実際、岡崎先生のお子さんには食物アレルギーがあり、小学校5年生までは小学校にお弁当持参だったとのことであった。アレルギー食のお弁当作りもあり、岡崎先生の分担無しでは家事育児をこなすことはできなかったそうである。家事育児は「淡々とこなす」との繰り返し語られていたが、その言葉は学生たちの心にも響いたようである。岡崎先生の「イクメン」体験は、育児を楽しむ今風の「イクメン」を思い描いていた学生には、かなりの衝撃であったようだ。講演会后、多くの学生がこの言葉を感想文の中で取り上げていた。

続いて「学校の女の子と男の子を考える」では、最初に学校の健康診断で座高を測定する意味と、以前は胸囲の測定がされていたとの話に、学生たちから笑いと驚きの声があがった。学校内の男女差別としてよく取り上げられる男女別名簿については、男女別名簿から男女混合名簿への移行を自ら小学校時代に経験している学生も多く、そのときの思いを講演会の感想文に記していた。男性教員という立場から、特に高学年の女子児童との関わり方が難しく、児童と距離を取る心がけの実践等も披露された。体調不良の女子児童を抱っこやおんぶをしていいかどうかの判断の難しさについても語られた。家庭科専科の教員の性別等、学校に於けるジェンダーの問題については、特に教員志望の学生たちが関心を持って耳を傾けていた。

最後に男の生きづらさについては、母親からの自立、成果への執着、肉体的・性的衝動のコントロールの3点が取り上げられた。その一方、女の生きづらさについては、黙っていたら解決するものではなく、不利益な場面に直面したら解決の道を探すべきであるとの見解を示された。家事育児についても、同じことの繰り返しこそ大切なことであり、意義のあることだと述べられた。厳しいときこそ仲間が必要であり、自分の背中には自分の値札が付いている。就職や結婚問題等、人生には様々な問題に直面する機会がある。トラブルが私たちを育てるものであり、弱音を吐いてもいいからチャレンジすることが大切と、これから就職そして結婚等の問題に直面するであろう学生たちにエールを送られて、講演会の幕が閉じた。

会場になった812教室が満席になる盛況ぶりで、惜しみない拍手に送られて、岡崎先生は会場を後にされた。

(文責 IGWS 運営委員 佐藤実芳)



学生感想文

吉兼悠里子

現小学校教員の岡崎先生は、20年ほど前から男性に育児時間や育児休業が与えられないことに疑問を持たれていた。意外にも「男性が育休なんてありえない」「どうせ子どもを見てくれない」という女性からの批判が多かったそうだ。当時、男性は外で働き、女性は家事・育児をするという家庭が多かったため、男性が育休をとることに抵抗があったのだろう。夫婦共教師である先生自身は、協力して子どもの面倒を見ていた経験から「家事・育児は好き嫌いではなく、楽しくてやるのでもなく、苦労しても淡々やるものである。」とおっしゃっていた。家事は生活のために必要不可欠なことだから、家族で協力してこなしていくものだと思う。「女性だけが家事をしなければならない」とか「男性は外で働いているから、家事をしなくてもよい」という規則はない。家事は独立しても生きていくために必要な技能だからこそ、家族一人一人がしっかり働き、みんなで支えあっていくことが大切だと思う。対して、育児は女性の方が適していると思う。出産や授

乳など女性にしかできないことがあり、子どもを守ろうとする母性本能があると思う人もいるだろう。だから、女性は「男性に育児を任せきれない」と思うのだろう。

常識的な男性観、女性観に着目して、現教師としても面白い見解を示された。自分の学級で男女混合名簿を導入した当時、他の先生から理解されなかったことや、「男は強いから力仕事」「女性はスカートの制服」というような常識的な男性観、女性観に疑問を持ったそうだ。私は小学校高学年頃に男女混合名簿になった世代だから、あまり違和感はないが、当初はかなり抵抗があったのだろうと思う。先生がおっしゃっていた常識的な男性観や女性観は、学校現場で特に注意しなければいけない問題だろう。将来教育現場に関わりたいと考える私は、曖昧な男性観や女性観ではなく、魅力的な男らしさや女らしさを伝えていきたいと思う。

(本学文学部教育学科2年)

粕山 裕

男の育休、という言葉は今回の講演で岡崎先生から直接お聞きするまでは、ブラウン管、あるいはインターネットの向こう側の言葉でした。テレビなどで頻りに紹介される一方で、私は実際に育児休業を取得された男性を見たことがなかったのです。

私も岡崎先生と同じ男であり、教員の道を歩もうとしている者です。いつかは結婚をし、夫となり、子どもが生まれて父となることなのでしょう。そうした時、育児休業を取得し、育児・家事をシェアすることができるでしょうか。今の私には恐らく無理だと思います。しかし未来の私が、淡々と、あるべきものがあるように捉え、なおかつ楽しめるような人間へと成長できるよう、今から自分を、そして個性を確立できるような努力をしていきたいと思っています。

子どもを育てる、ということに最も色濃くかわっ

てくる性差は「父・母」なのだと思います。「ジェンダー」の視点で考えた時「父・母」の役割を完全に入れ替えることはきわめて難しいと思います。入れ替えたとしても、それでは「男の母親」「女の父親」になるだけです。「男にしかできないこと」と「女にしかできないこと」があるかもしれません。両者の特性を認め、互いに尊重しあうのが「ジェンダー」の姿なのではないでしょうか。互いに尊重しあい、自らの特性を活かしてお互いにカバーしあえる姿こそが理想的な夫婦生活、家族生活、ひいては人間生活であると思います。私も将来、理想的な支えあいの家庭生活を送るため“育休”について考え、また“協力の気持ち”を持ち、あるいは育み続けていきたいと思っています。

(本学文学部国文学科4年)

男性的職業のもとでの思い

鈴木 千佳

現在私は貿易商社に勤める傍ら、自主映画製作をしています。昨年2010年10月には、名古屋のアートギャラリーにて、無事個展を開くことができました。

映像制作は男性の職業に思える方も多いでしょう。実際、私が以前就職していた映像制作会社には、女性に比べて男性の比率が多く、女性は事務仕事か営業職をしていました。その背景には体力的な問題が関係しているといえます。実際私がその映像制作会社を辞めた理由の一つに、過酷な労働条件というものがありました。休みは週に一度、朝から晩まで1日中働き通しで時間も不規則です。撮影の際に使うカメラ等の機材類は投げ捨ててしまいたくなるほど重く、編集になるとパソコンの前に1日中座りっぱなしで体はガチガチでした。また身体が弱ると、次第に精神的にも辛くなってきます。就職活動の時、こうした重労働を想定して、それに耐えることのできる自信があるかどうかを質問する会社もありました。このような身体的理由により、女性が現場で働くのはなかなか難しいかもしれません。それでも諦めずに映像制作に携わる女性を私は何人か知っています。私もそんな女性の中の一人ですが、私にはもう一つ叶えたいことがあります。

私は元来映画好きでしたが、実際に映画製作に携わることになったきっかけは、就職活動でした。大学3年生の1月、どのような職業に就きたいかを考えているうちに、まだ大学生のうちにやり残していることがあると気付いたのです。それは長期留学と映画製作でした。私は幼少の頃から、日本よりもアメリカの映画やテレビドラマを多く観て育ち、アメリカ文化に強い興味・関心を持つようになっていました。それが理由で、日本で就職をする前にアメリカで映画製作を学んでみようと思ったのです。

留学の最初の3ヶ月間、住もうと決めた町はニューヨークです。英語力の低かった私は、映画製作の専門学校に行く前に、語学学校で英会話の練習をする必要がありました。しかし、語学習得だけに時間を費やすのはもったいないと考えたので、芸術とエンターテインメントが凝縮された町ニューヨークで、アメリカの文化に触れて生活しようと考えたのです。私は時間が許す限り、多くの美術館や博物館に足を運び、バレエやミュージカルなども観て、マンハッタンや近郊都市を練り歩き、アメリカ文化を肌で感じながら生活を送りました。ニューヨークではたくさんの人々が生活していますが、国籍を問わず、男女共に目的を持って生活をしている人ば

かりでした。そのため出会う人全てから刺激を受け、多くを学ぶことができました。その後、映画製作を学ぶためにハリウッドへ移り住みました。専門学校入学直前で、英語でコミュニケーションが取れるかどうか心配でした。ネイティブと同程度の英語能力などはもちろんありませんでしたが、次第にクラスメートと打ち解けていくことができました。打ち解けることができた一番の理由は、言葉ではなく、私の作る映画作品でした。彼らが私の作品を気に入ってくれたのです。私が出会った多くのアメリカ人は、外国人であれ、女性であれ、誰もを一人の人間として認めてくれました。そのような許容力があるのは、多人種が共同生活してきたアメリカの歴史的背景があるからなのでしょう。

この専門学校にも女性はいましたが、映画制作コースの生徒は全体の90%が男性でした。この学校はハンズオン（実技演習）が殆どで、プロさながらに忙しく、男女関係なく生徒全員にとって過酷な学生生活が求められました。途中で退学する生徒もちらほらいましたが、嬉しいことに私と同期の女性は誰一人として退学をしませんでした。また学校の特別講師として、プロの女性映画制作者が授業を執っていました。彼女はスクリプトスーパーバイザー（脚本を見ながら撮影前後の繋ぎの記録をして、おかしい点が無いかをチェックする人）という、体力を必要とするよりはむしろ頭脳を用いる仕事をしている方でした。彼女はとても賢く聡明な印象がありました。化粧も全くせず、女つけも全然ない方でした。実際の映像制作作業を体験し、またそのようなプロの女性を目の当たりにして感じたことは、映像制作はやはり、女性が「女性的」であることの難しい職業なのかなということでした。

女性にとってこれだけ大変な職業であると知りつつも、私はいまだに映像制作に魅力を感じています。私の叶えたいことというのは、アメリカで再び彼らと一緒に映像制作をしたいということです。なぜ日本では駄目なのかと聞かれますが、私は多文化が集まるアメリカで、彼らとともに、多様な価値観をぶつけ合い、認め合い、それらを組み合わせながら映像を作っていきたいのです。そんな私は、これからもアメリカでの映像制作を夢見て日々努力していくつもりです。

(本学文化創造学部多元文化専攻 2007年卒業)

「かわいい」を上代にさかのぼる



中野 謙一

本誌の前号に、国文学科3年の鈴木翔平君の感想文が掲載されていた。彼は昨年6月に開催された連続講座『ジェンダーを演じる—装う／奏でる／話す』を受講したそうで、その第1回「『かわいいメンズ』の時代?」について書いている。専門分野外にも興味・関心をもって積極的に学ぼうとする姿勢を、学科の教員としては大いに評価したいと思う。ただ、「かわいい」に関することばの面からの考察がほしかった気もする。もちろん、限られた字数の感想文にそれを望むのは無理な注文であろう。彼の今後の研究に期待しつつ、ここでは私の専門分野である上代文学のなかに、「かわいい」という意味をもつことばを探してみたい。

そのまえに、「かわいい」について『日本国語大辞典第二版』（小学館、2001年）の語釈をみておこう。

- ①あわれで、人の同情をさそうようなさまである。かわいそうだ。ふびんだ。いたわしい。②心がひかれて、放っておけない、大切にしたいという気持である。深く愛し、大事にしたいさまである。いとしい。③愛すべきさまである。かわいらしい。④（若い女性や子どもの、顔や姿が）愛らしく、魅力がある。⑤（子どものように）邪心がなく、殊勝なさまである。いじらしい。⑥（物や形が）好ましく小さい。また、小さくて美しい。⑦とるに足りない。あわれむべきさまである。やや侮蔑を含んでいう。

現代文化の問題として論じられるのは、ほとんどが若者の使う「かわいい」である。そこで、少なくとも若者は使わないであろう①と、使うとしても特殊な状況に限定されるはずの⑤は除くことにする。②は若者の「かわいい」には重すぎるし、上のいずれにもあてはまらないような用法も報告されているが、ここではおおよそ②・③・④の意味でとらえておきたい。

「かわいい」は、平安末期以降にみえるカハユシが次第に変化してできた語である。カハユシの語源は顔ハユシ（顔がほてるようだ）で、物をまともに見るに堪えない、ということから、相手をいたいたしく思う「かわいそうだ」となり、さらに憐みが恋慕に移行していった（大野晋『日本語の年輪』＜新潮文庫、1966年＞）。では、カハユシの成立以前、「かわいい」の意味を表すのに用いられたことばは何か。四方田犬彦『「かわいい」論』（ちくま新書、2006年）は、ウツクシがそれであるといい、『枕草子』146段の例を「かわいい」の源流としている。しかし、ウツクシという語は『日本書紀』や『万葉集』などの歌にも用いられており、それらは「かわいい」と訳

されることがある。

ウツクシのほかに「かわいい」の意味をもつ可能性のある語はないか。『現代語から古語を引く辞典』（三省堂、2007年）を引いてみると、「かわいい」にあたる古語はアイアイシ以下39語も出てくる。そのうちの17語は『時代別国語大辞典 上代編』（三省堂、1967年）に立項されており、上代から存在した語であることがわかるが、「かわいい」に類する意味での用例が上代にはみあたらないものが多い。たとえば、室町時代以降にウツクシとの混同が生じるイツクシは、上代のすべての例で神仏の霊威を表す語として用いられており、「かわいい」との間には相当の距離がある。これらを除き、残る6語（アハレ・ウツクシ・カナシ・ハシ・メヅラシ・メグシ）については、一応「かわいい」または「かわいらしい」と訳しうる上代語といえる。

しかし、ウツクシとメグシを除く4語は、妻や恋人に対する「かわいい」に近い感情を表す例がみられるが、中心的な意味は別にあると考えられる（それぞれの語義については『万葉ことば事典』＜大和書房、2001年＞など参照）。たとえば、「……家にして子持ち瘦すらむ我が妻かなしも」（万4343）のカナシが表すのは妻への愛情ではあるが、「かわいい」よりも「せつない」気持である。またメグシは、ウツクシとともに妻子への愛情を表す例があるものの、気がかりに思うというのが中心的な意味であろう。

さて、ウツクシの上代における確例（「愛」などの訓字表記を除く）は9例ある。人以外にかかる1例（風土記歌、かかり方未詳）を除き、上代のウツクシは「自分が優位の立場から抱く肉親のないし肉体的な愛情」を表すと説明されている（宮地敦子『身心語彙の史的研究』＜明治書院、1979年11月＞）。これならば、「かわいい」の②の意味とは重なるところがある。ただし、防人の妻が夫に対してウツクシといった例があり（万4422・4428）、優位の立場からとする点には疑問が残る。書紀の2例がともに悲傷歌で、亡き妻・孫に対して用いられていることなどからすれば、ウツクシはカハユシと同様に憐みから発して愛情を表すに到った語ではないか、と考えられそうである。憐愛の情ならば、上位者が下位者に対して抱くことが多いものの、逆もありうるはずだ。夫に対するウツクシは「いたわしい」に近く、「かわいい男」というのと同列におくことは無理であろう。なお、「かわいい」の③や④の意味をもつ上代のことばは確認できなかった。

（本学文学部国文学科講師）

第4回「ジェンダー視点の卒業論文」報告会 開催

2011年1月21日(金) 長久手キャンパス 827教室

1月21日(金)に第4回「ジェンダー視点の卒業論文」報告会を開催致しました。

今年度は、現代社会学科より1名、言語コミュニケーション学科より2名、英文学科より1名の報告がありました。学部を問わず、ジェンダー・バイアスに意識的な卒業論文を書いた学生らによるこの報告会は、ジェンダー視点を共有し合う新たな刺激の場所となりました。また授業日にも関わらず、学生、教員の参加があり活発な意見交換がなされました。以下は報告者の顔触れと卒業論文のタイトルです。

「大卒女性の就業継続とキャリア形成」



現代社会学部現代社会学科

田中 佑佳

「女子大生の職業選択と家族関係についての調査」



コミュニケーション学部言語コミュニケーション学科

城 香澄

The importance of teacher's behavior on elementary student: Students' consciousness of gender



コミュニケーション学部言語コミュニケーション学科

中村 春菜

「モンゴメリと少女孤児物語」



文学部英文学科

山下 景子



報告会の後に
茶話会を開催し、
終始和やかな
雰囲気でした



「女子学生のための護身術 一心構えから実践まで」を開催

12月3日に、Wen-Do プロジェクトインストラクターの大沼もと子さんを講師にお招きして、長久手キャンパスで護身術講座を開催しました。大沼さんはCAP（子どもへの暴力防止プログラム）のスペシャリストとして活動後、カナダで生まれたWen-Do（自己防衛プログラム）を日本に初めて紹介する企画、運営に携わった方です。講座は、定員20名で開催致しました。

■ 護身術講座に参加して

近藤恵梨奈

この講座に参加するまで、護身術といえば暴漢対策の小技集、あるいは武術の堅いイメージがあった。しかし、実際の講座は良い意味で予想と大きくかけ離れており、女性としての生き方について今一度考えさせられるものになった。

中でも特に印象的だったのは、大沼もと子講師がデモンストレーションに移る時、1つの質問を提示したことである。「女性は、男性の体力や筋力にかなわないのか？」確かに、男性は女性より筋肉が発達しやすく、強い力を出せる。それが、男性から女性への暴力が後を絶たない一因にもなっていると記憶している。周知の事実をあえて尋ねた理由を、大沼講師はそのデモンストレーションで教えてくれた。例えば腕をつかまれた場面、その力を利用して隙を作り、すぐに逃げるといった単純な行動だ。しかし、隙作りの際に彼女が出した大声には、少し離れた位置であってもかなり圧倒させられた。まさかこんな小柄な女性が、という意外性で加害者をひるませる方法だ。また、周りへ危機を知らせ、酸素を取り込んでパニック状態を防いで冷静さを保つ利点もある。更なる身の危険を感じるような場面でも、鼻や首元など人間の急所を突けば、自らの危機も自分自身で回避できると大沼講師はいう。「どんなに力が強い人でも弱点はある」という説得力ある言葉には勇気づけられた。同時に、その点に今まで気付かなかったことに静かな衝撃を受けた。多くの女性は性別による身体的力量差を認識しているが、それが精神面にも影響し、結果的に男性への抵抗を諦めていることにもなり得る。単なる固定概念に潜む影の恐ろしさを、全身に感じ取った。

今回は実地の利便性、そして心理的サポートも兼ねていた。「変だ」「怖い」という自身の直感を信じること。「自分を守るための選択肢がある」ことを自信に繋げることも護身術である。それらを考慮に入れて「はあッ！」と声に出した。言葉で表現できない充足感が続いた気がした。

(本学グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科1年)



第24回定例セミナーのお知らせ

デートDVと恋愛(仮題)

講師 伊田 広行さん (立命館大学非常勤講師)

開催日程 2011年6月予定

詳しい開催日時、場所につきましては、後日愛知淑徳大学ジェンダー女性学研究所HPに掲載致します。どうぞお気軽にご参加下さい。

<2011年度(前期 / 後期)>

愛知淑徳大学、ジェンダー・女性学関連の授業

開放講座

女性学・男性学
(前期/後期)長久手 / (前期)星が丘
講師 / 中島 美幸



<問い合わせ先>エクステンションセンター
〒464-8671 名古屋市千種区桜が丘23
TEL : 052-783-1665 FAX : 052-783-1621 (直通)
受付時間 : 土・日・祝日を除く9:00~17:00
<http://www.aasa.ac.jp/extension/index.html>

<申込期間>

前期 2月14日(月)~3月4日(金)必着
後期 7月25日(月)~8月19日(金)必着
*前期申込受付期間は終了致しました。

聴講・科目等履修(学外向け)

人権・ジェンダーと教育(後期)長久手
講師 / 小出隆司・若松孝司

ビジネスとジェンダーII(前期)星が丘
講師 / 原山恵子

ジェンダー論(前期集中・後期集中)星が丘
講師 / 三輪敦子

<問い合わせ先>教務事務室
〒480-1197 愛知郡長久手町長湫片平9
TEL : 0561-62-4111 (代表) FAX : 0561-63-1844
受付時間 : 土・日・祝日を除く9:00~17:00
<http://www.aasa.ac.jp/faculty/kamoku/index.html>

<申込期間>

前期 2月14日(月)~2月23日(水)必着
後期 6月20日(月)~7月1日(金)必着
*前期申込受付期間は終了致しました。

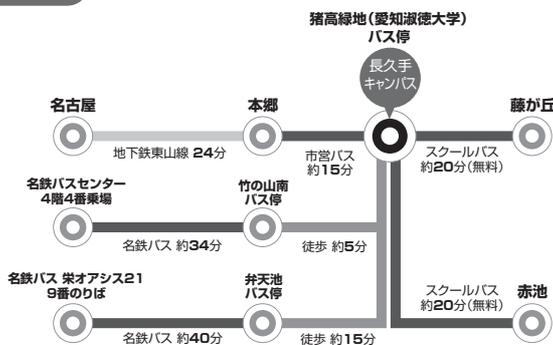
施設利用案内

どなたでもお気軽にお立ち寄り下さい。一人でもお友だちと一緒にでも大歓迎です!

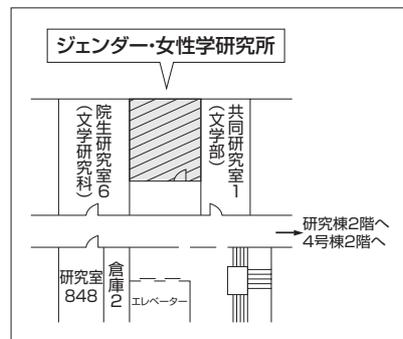
開室日 毎週月曜日~金曜日 **開室時間** 9:00~17:00

場所 愛知淑徳大学長久手キャンパス8号棟 4階

案内図



■長久手キャンパス8号棟 4階



編集後記

今年度後半の定例セミナーでは、小学校教員である講師の岡崎勝さんが「家事・育児は本当に楽しいか」と題して、男性に対する「育児休業」がまだ認められていなかった時代の子育て体験や、学校におけるジェンダーの問題について講演されました。特に教員志望の学生たちが関心を持って耳を傾け、会場は満席となる盛況ぶりでした。

なお2011年度は、所長、事務担当が代わる予定です。今後とも引き続き宜しくお願い致します。

(高橋 博子)

ASU・IGWS2010年度

運営委員

平林美都子(所長兼) 石田好江 國信潤子
酒井晶代 佐藤実芳 菅野育子 棚橋昌子
森井マズミ 米倉五郎 若松孝司

事務担当

高橋博子